この本を読んでくれるみなさんへ

トニーとわたしは小さいときから友だちで、ふたりとも子ども時代は妖精に夢中でした。でも、妖精を信じることが大きな意味を持ち、それが試されることになるとは思ってもいませんでした。

ある日のこと、トニーとわたしは、ほかの何人かの作家たちといっしょに、大きな本屋でサイン会をひらきました。サイン会が終わっても、本をならべるのを手つだったり、おしゃべりをしたりして、本屋の中をぶらぶらしていました。やがて、店員のひとりが近づいてきて、手紙をあずかっているというので、どちらあての手紙かとたずねました。わたしたちは、その返事にびっくりしました。「きみたちふたりあてだよ」というのです。

その手紙の内容は、次のページにそのままのせました。トニーは手紙につい

ていたコピーを、長い間じっと見つめていました。そして、その手書きの本のコピーを見ながら、これはすごいぞと小さな声でつぶやきました。わたしたちはいそいで返事を書き、封筒におしこみ、店員にグレース家の子どもたちにとどけてくれるようたのみました。

まもなく、赤いリボンでしばられた小包が玄関にとどき、その数日後、三人の子どもたちがベルを鳴らして入ってきて、この物語を話してくれたのです。

その後のことは、うまく説明できません。トニーとわたしは、それまで本気で信じてはいなかった妖精の世界に、どっぷりつかってしまったのです。妖精が、子どものお話の中だけのものでないことがよくわかりました。目に見えない世界というものがあるのです。この本を読んでくださるみなさんも、どうか、その不思議な世界に気がついてください。

ホリー・ブラック